

氏名 村 上 昌 穂

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 博 乙 第 1972 号

学 位 授 与 の 日 付 昭 和 63 年 12 月 31 日

学 位 授 与 の 要 件 博 士 の 学 位 論 文 提 出 者 (学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当)

学 位 論 文 題 目 脳 性 麻 痺 に 関 す る 臨 床 的 研 究

第 1 編 Dystonic型および athetotic型脳性麻痺患者の筋電図学的研究

第 2 編 脳性麻痺における定位脳手術と遠隔成績

論 文 審 査 委 員 教 授 大 田 原 俊 輔 教 授 大 月 三 郎 教 授 森 昭 胤

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

脳性麻痺の運動症状に関する American Academy for Cerebral Palsy の分類による athetotic に属する dystonic 型と tension-athetotic 型の不随意運動と筋緊張異常亢進の改善を目的として、視床や基底核を手術目標とした定位脳手術が行なわれるが、両型で手術成績に著しい差があるため、症候学的に類似した両型の鑑別が表面電極を用いた筋電図から可能か否かを検討した。筋電図の記録は、安静時、精神的緊張時、随意運動時、伸張反射の型について行なった。dystonic 型では、筋放電は tonic パターンが主体であり、rigidity ないし rigidospasticity 型の伸張反射を特徴としたが、tension-athetotic 型では、筋放電は phasic パターンが主体であり、spasticity 型の伸張反射を特徴としており、両者の鑑別は可能であった。

定位脳手術が行なわれた両型の脳性麻痺96症例のうち、遠隔成績の調査できた43症例について、手術成績および遠隔成績を retrospective に検討した。手術目標は、視床腹外側核の方が淡蒼球に比較して有効例が多かった。病型別には、dystonic 型の方が tension-athetotic 型より有効例が多かった。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は脳性小児麻痺におけるジストニアとアテトーゼに対する脳外科的治療に資せしめる目的で両者の筋電図学的鑑別、及びVL、GPを標的とする定位脳手術の効果を長期追跡を含め検討したものであり、適応設定に重要な貢献と認める。

よって、本研究者は医学博士の学位の得る資格があると認める。